

画像でみる岩木山信仰の習俗の変化

小山隆秀^{※)}

Changes in the Customs of Mt. Iwaki Worship in Images

OYAMA Takahide

キーワード：岩木山信仰、百澤寺、岩木山神社、神仏分離、絵画資料、写真、COVID-19、コロナ禍

はじめに

青森県津軽地方の霊山岩木山は、中近世以来、津軽平野におけるランドマーク的な存在として、多くの人々の信仰を集めてきた。そのなかでも代表的な習俗が「お山参詣」と呼ばれる登拝行事である。毎年旧暦8月1日(八朔)が近くなると、津軽地方の各ムラの男達は、約一週間の精進潔斎をして、白装束となり、長大なゴヘイやノボリを捧げて隊列を組んで笛や太鼓、手平鉦で登山囃子を鳴らしながら歩き、岩木山に登拝し、豊作の感謝を捧げた。登拝を終えた男性は一人前として認められたという。

このお山参詣は、昭和59年(1984)1月21日に国の重要無形民俗文化財「岩木山の登拝行事」として指定されている。その指定の内容として公開されている文章は次のとおりである。

津軽一円から岩木山へ向かい、御来迎を拝み帰還する。

村落や地区の人々が集団で登拝するのが特色であり、以前は男性のみが登拝の約10日前から準備し、精進潔斎しつつ、御幣や幟を仕上げ、出発の前日には餅をつく。

笛、太鼓、手平鉦の囃子に合わせて「サイギ、サイギ…」の唱え詞を歌いながら徒歩で岩木山神社に到着、供物や幟等を奉納し、旧暦8月1日の御来迎を拝むために頂上の奥宮へ向かう。下山して神社に報告し、「バダラ」を踊って帰途につき、持ち帰った御福コ(御菓子)を留守の人々に分け与える。

岩木山は古くから聖なる山として信仰の対象となり崇められていた。いつのころからか登拝は年中行事となり、津軽地方の生活・文化に深い影響を与えた。男性に限られていた登拝は明治5年(1872)に女人禁制が解かれた(1)。

この説明は、指定当時の行事形態を示しているといえよう。しかし、お山参詣の起源や歴史は明らかではない部分が多く、指定要件にある「津軽地方の生活・文化に深い影響を与えた」とするその具体例が何かについても明らかにされておらず、今後の研究課題である。

岩木山信仰の起源については史料も少なく、様々な伝説があって明らかではない。伝説によれば、宝亀3年(772)または宝亀10年(780)に山頂に社殿を創建したのが始まりだと伝えられる(2)。そして寛治5年(1091)に、岩木山麓十腰内にあった旧下居宮から登る参詣者が異変に遭うことを避けるため、現在岩木山神社が鎮座している百沢の地へと遷宮したといい、当時すでに岩木山登拝が行われていたと伝えるがこれも明らかではない。

この岩木山登拝は、近世期は「御山参詣」「御山参」などと記され、近代以降は民衆が「お山参詣」「オヤマサンケ」「ヤマカゲ」などと呼称するようになった。よっておそらくその呼称には、近世以来の連続性があるだろう。筆者は以前、近世の岩木山信仰を統括していた真言宗百澤寺旧蔵の史料から、主に近世後期における八朔の岩木山登拝に関わる藩主代参行事の実態と、百澤寺らによる旧弘前藩領内全域への組織的布教活動があったことについて明らかにした(3)。しかし、その藩主代参の後に登る民衆が、具体的にどのような行為をしていたのかについては、文字史料中心の分析からは断片的な情報しか導き出せていない。その後、歴史学の研究が、近世史料等の分析から、百澤寺の概要を明らかにし、明治初年の神仏分離によって岩木山神社へと交替した経緯について、弘前藩や明治政府、宗教者側の動きと制度の変化をまとめている(4)。しかし、それらの変化が、近代以降の民衆の信仰に具体的にどのような影響を与えたのかについては、今後さらなる研究が必要であろう。

本稿は、それらの岩木山信仰史研究上の課題を補うことを目的として、近世の登拝を描いた絵画資料を分析する。加えて、近代のお山参詣を撮影した写真資料と比較することで、民衆のお山参詣の実態とその習俗の歴史的变化の詳細を考察するものである。

(※) 青森県立郷土館学芸課副課長・学芸主幹(民俗担当)

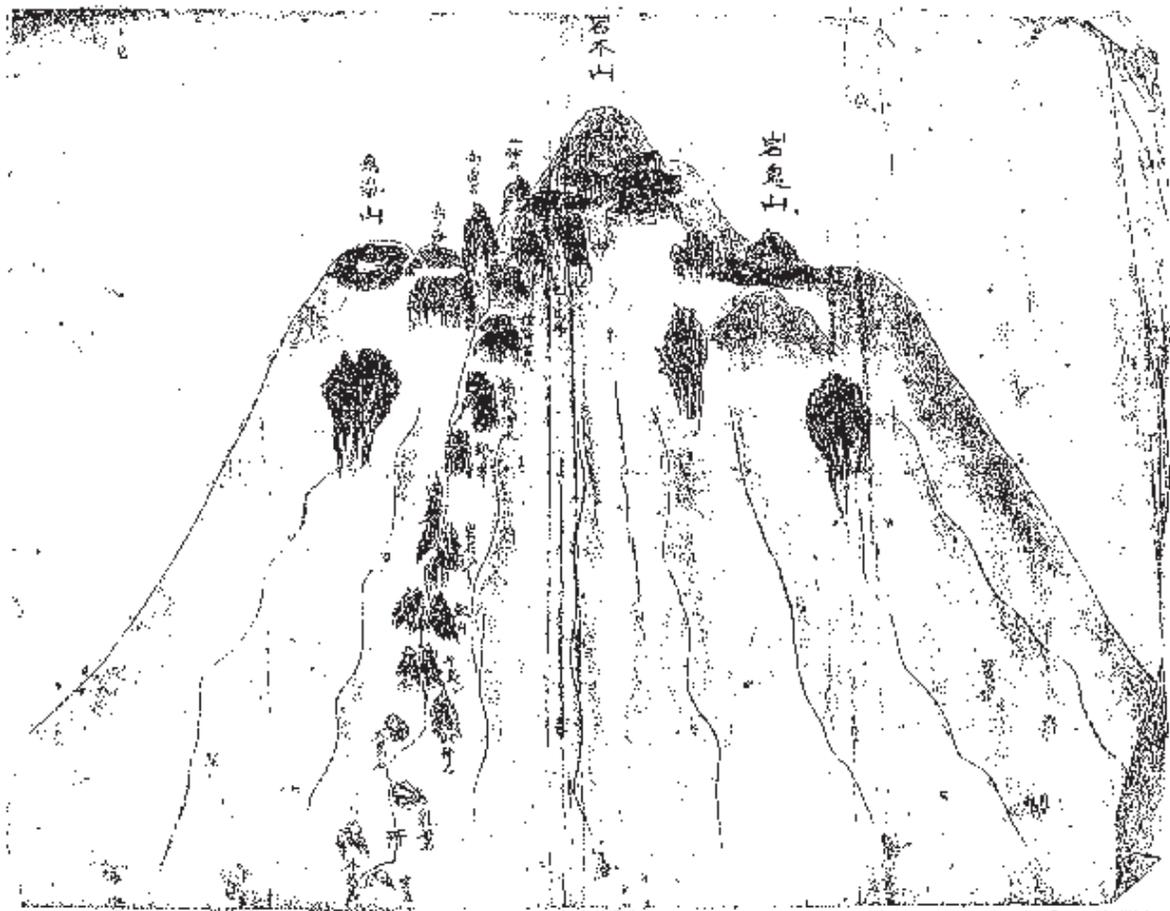
1 近世の岩木山信仰

史料上で岩木山の登拝行事が「御山参詣」「御山参」として記されるのは、寛文年間(1661～72)以降である。当時は弘前藩主の代参行為として、近世の岩木山信仰を統括していた真言宗百澤寺らが中心となって、八月一日の「八朔」に登拝して山頂で祈祷する藩公認の儀礼があった。その具体的な内容は、百澤寺が18世紀前半に記し、近代以降その後を継いだ岩木山神社が所蔵する近世史料「岩木山年中行事」に詳しい。加えて、百澤寺や配下の十の寺庵(十坊)と二つの神社(二社)らが、津軽ほぼ全域へ「引札」を配布するなどの布教活動をしていた様子もみえるため、筆者は、そのなかから民衆を御山参詣へと誘うような信仰の素地が形成されていた可能性を提示したことがある(5)。

その一方で、民衆がいつから登拝していたかについては明らかではない。例えば、慶長15年(1610)8月1日付の「信政公御願書」(国立史料館蔵)に、8、9月に精進潔斎をした多くの人々が岩木山に登拝したという記述がある。さらに、弘前藩国日記の貞享元年(1684)7月19日条の記述では、八月朔日に百澤寺が代参するとともに、大勢の人々が参詣したとある。その後、寛政年間(1789～1800)の「奥民図彙」には、現代の白装束とは異なる「紅染ノ木綿」の衣装を着た参詣者の姿が描かれている(6)。

それでは、そのような参詣者達を統括するものはいたのか。これまで岩木山信仰史研究では、組織的に民衆の信仰を牽引していく体制や御師のようなリーダーの存在は確認されていない。しかし、前述の「岩木山年中行事」によれば、当時の参詣は、リーダーである「先達」が参詣者である「道者」(または「導者」)たちを率いて登拝し、旅籠や木賃宿の賄料を集めていたことが記されている。さらに、陸奥湾に面した弘前藩領内の漁村である平内では、その先達のような役割として、在地の修験とみられる「大光院」「宝勝院」が、四十数名の参詣者に、道場で別火精進させて御山参へと引率していた記録もある(7)。

次に、近世の御山参詣に参加していた人々の具体的な習俗を、当時の絵画史料から分析していく。



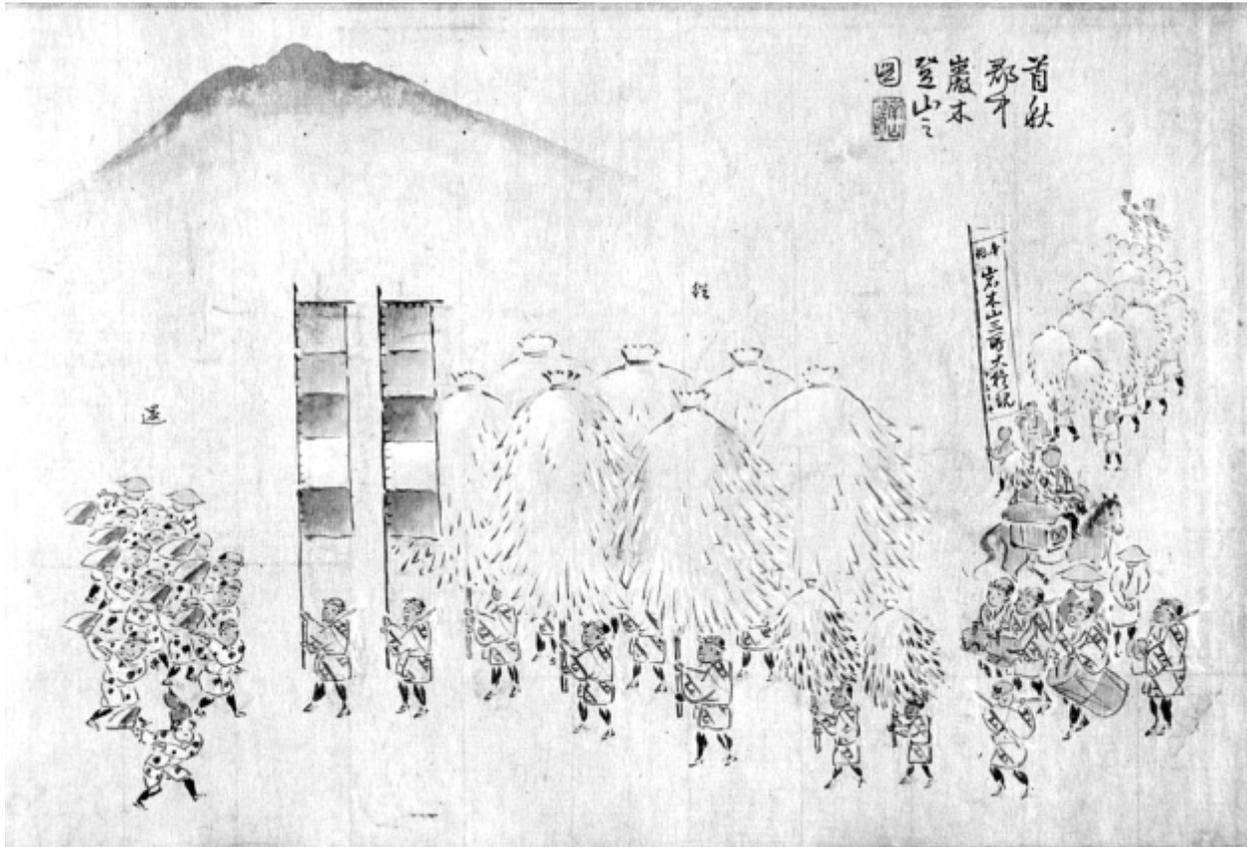
図① 岩木山絵図(近世、弘前市小山秀弘家蔵)

図①は、近世後期に発行されたとみられる絵図で、岩木山の山容と共に山中の名所を墨書している。当時の民衆は主に、百澤寺がある山麓の百沢の地から登っていたと考えられている(8)。この絵図も百沢からの登山ルートを描い

ている。絵図中央下方の山麓部から上方へ向かって、順に「箸立」「外道石」「乳母石」「大黒石」「山神石」「午辰シ」「剣山」「岩石ヘタリ」「剣ヶ峰」「錫杖清水」「種蒔苗代」「竜ヶ馬場」「胎内クグリ」「鳥ノ海」「御蔵石」「二神石」という山中の名所の絵が描かれている。山頂は、中央が「岩木山」、向かって右側が「岩鬼山」左側が「鳥海山」と記されている。これらの山中の名所のなかには、近代以降も人々の間で伝承されてきた地名もあれば、現在は忘却されつつある地名もある。例えば、昭和43年(1968)に岩木山中の各登山道における各名所について、標高とともに図示した資料があるが、図①と一致する名所は「箸立」「乳母石」「錫杖清水」「種蒔苗代」「御蔵石」「二神石」のみである。その他の記録では、近世当時の御山参詣の名所について、山麓から山頂へ向かって順に「七曲(ななまがり)」「鼻コグリ」「姥石」「焼止(やけどまり)」「大沢」「坊主ころばし」「錫杖清水」「種蒔苗代」「御倉石」「風穴(ふうけつ)」「一の御坂(または「おみさか)」「二の御坂」「三の御坂」を経て、山頂へと到達したという。さらに近世の百澤寺時代の岩木山信仰を記したと推測される史料「合浦奇説」(年代及び作者不明、個人蔵)では、山麓の百沢から「萱立(かやたち)」「箸立(はしだて)」「姥石」「大沢」「一の御神坂(おみさか)」「大黒石」「山神石」「座当転(ざとうころばし)」「錫杖清水」「旻泉(れいぜん)」「西院河原」「剣ヶ峰」「種蒔苗代」「御倉巖(おくらいし)」「風穴」「鳥の海」「一の御神坂」「二の御神坂」「三の御神坂」「胎内潜(たいないくぐり)」と経て山頂に至ることが記されている。それぞれの記録では、少しずつ名所について差異があるようだ。なお「大黒石」については、昭和52年(1877)に地元の郷土史家による論考で、岩木山の各登山道には「姥石」「大黒石」「二神石」「大石」と名付けられた石がある、と言及されているので、「大黒石」等も当時は一部の識者には記憶されていたのであろう(9)。しかし現在ではあまり知られていないようだ。なお図①は、中下級クラスの旧弘前藩士家から発見されたものだが、弘前藩は、藩主代参以外、藩士達の登拝を禁じていたと伝えられるため、この図がどのような目的で所蔵されていたのか、今後の分析が必要である。

次に「東奥津軽山里海観図」(元治元年(1864)刊、2冊、青森県立郷土館蔵)の一連の絵画のなかに収められている岩木山関係の絵画をみていく。これらの絵画を描いたのは、旅の絵師「清白閑人」という人物である。彼は、文久元年(1861)秋に大阪を出て東北地方へ向かい、弘前藩の城下町弘前の富田に3年間居住した。兼平、高木、佐々木という絵師仲間と交流しながら、津軽各地を歩いて、景勝地や人々の生活習俗を描いた。本資料は「甲子(元治元)年(1864)春二月中」に完成し、高木俊翠に贈られたとみられる。その後、1990年代に京都市の古美術商に所蔵されていることが確認された。青森県立郷土館の調査により、青森県の歴史・民俗に関わる貴重資料であることが判明したことから、平成16(2004)年に同館が入手し収蔵した(10)。

収められている図は、総計132図で、弘前藩領内の霊山岩木山、山里の景勝地である目屋および暗門の滝、城下町弘前と黒石、西浜と呼ばれて近世海運の重要港があった鱒ヶ沢、金井ヶ沢、大戸瀬、深浦、津軽半島北部の竜飛、小泊、十三、三厩や、現在の青森市郊外にあたる野内、浅虫などの景勝地が描かれている。また当時の民衆の暮らしとして、ねぶた、お山参詣、嶽温泉での湯浴み、盆踊り、鱒ヶ沢の綱引き、冬の防寒装束や除雪、遊び、さらには人々が食する魚類等、様々な文物、行事や習俗も描いており、現代の状況との変化を比較することができ、歴史学、民俗学、自然史、博物誌等の研究においても貴重な資料である(11)。そのなかには「巖木十八景」として、幕末の岩木山の名所と登拝習俗の様子を描いた複数の絵画も収められている。なお、本稿における当該絵画の紹介順は、掲載順ではなく、実際の登拝習俗で人々が体験する場面の順番に一部変更して紹介することとする。



図②「首秋郡中巖木登山之図」

図②は、絵の右側に「往」という文字が記されていることから、右側から中央、左にかけて描かれている集団は、これから岩木山登拝へ行く参詣者達の一行を描いていると推測される。当時は、真言宗百澤寺が岩木山信仰を統括していたことから、大きな幟旗にも同寺が祭祀していた「岩木山三所大権現」の名前が記されている。また鉢巻姿で衣装を揃えた参詣者達が、抱え太鼓と笛のようなもの、手平鉦等を鳴らし、大きなゴヘイと五色の旗を掲げて隊列を組んで進む様子は、近代以降の民俗誌が記録してきた習俗の形態と重なる。しかし、その装束が白を基調としながらも赤色の縞模様が入っている点は、白一色が主流となった近代以降の装束とは少し差異がある。また五色の旗が横縞であることも、近現代の縦縞の五色の旗とは異なっている。



現代のお山参詣における白装束と縦縞の五色の旗、岩木山神社と記した幟
(2008年、岩木山神社にて筆者撮影)

さらに絵の左側には「還」という文字があり、登拝が終了して帰る様子を描いている。下山する人々は登拝時とは異なる装束となる。一行が烏帽子をかぶり、扇などを手に乱舞しながら帰ってきた様子を描いており、その行為は近代の民俗資料や聞き取りが記録してきた「バダラ踊り」と重なる。



図③弘前大行院前載雪中岩木山之景



図④「巖城山百澤寺境内黎明之景」

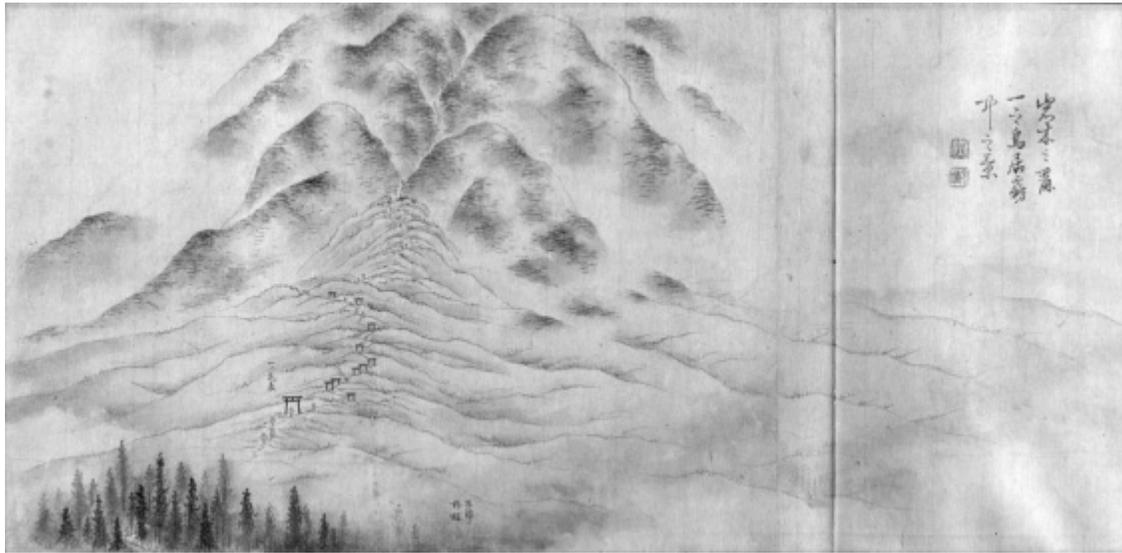
図③は、一行が向かう先の岩木山の山容である。城下町弘前から遠望した姿であり、現在と変わらない山容である。前掲の図①と同じく、山頂部は、城下町弘前から向かって、中央が「岩木山」、右側が「岩鬼山」、左側が「鳥海山」と記されており、その名称は現代も変わらない。

図④は、明治3年(1970)に廃寺となった真言宗百澤寺境内の全容について、上空から俯瞰するように描いたものである。百澤寺廃寺後、その役割を継いだ現在の岩木山神社の概要と比較すると、様々な変化と継承点を確認できる。絵画の左側から見ていく。境内の入り口付近が石垣のようなもので三方を囲む構造となっていること、石灯籠が建っている様子は、現代の風景と重なる。しかしそこから百澤寺境内へと入っていく正面の入り口とみられる場所に二つの門柱と板塀のようなものが建てられている点は、現在の様子と異なる。その後、山門に向かって、絵の右方へと長い上り坂の参道を登っていくことになるが、この絵では少しデフォルメされており、現実よりも平坦で狭い空間として表現されている。その区域内の絵画中央部に大型の鳥居が建つ。これは現在の参道途中に残る複数の大型鳥居のいずれかと一致するものであろうか、今後のさらなる分析が必要である。さらに参道を登っていくと、途中の橋上に屋根をかけた平屋の構造物があるが。これは現在存在しない建物である。「百沢之図」(岩木山神社所蔵)に記されている「神橋」であろうか(12)。また現在その左脇には、お札やお守りを販売する建物があるが、この絵図では存在せずに、広い空間となっている。さらに参道を登ると、山門(近代以降の「楼門」)、大堂(近代以降の「拝殿」)、下居宮(近代以降の「本殿」)の建物が描かれている。これらは順に、現在の「岩木山神社楼門」1棟、「岩木山神社拝殿」1棟、「岩木山神社本殿、奥門、瑞垣、中門」4棟として、明治41年(1908)と昭和46年(1971)に国の重要文化財(建造物)に指定されている建物と一致しているとみられる。

さらに参道の左側(絵左奥)には塀が並び、複数の門構えと建物が描かれている。これらは、近世を通じて百澤寺と共に岩木山信仰を支え、明治初期に廃寺となった「十坊」という寺庵だと推測される。十坊の内訳は山門に向かっ

て山上左側から「福寿坊」「山本坊」「西福坊」「南泉坊」の建物があり、その隣に社家の山田家の建物があった。山上右側は順に「東林坊」「田林坊」「徳蔵坊」「満福坊」「法光坊」の建物が並び、その隣に社家の阿部家の建物があった。現在これらの十坊及び二社の建造物は全て失われたとみられる。そのなかに鳥居のある小社も描かれているが、これは前述の大鳥居とともに、百澤寺時代にその配下で「二社」と呼ばれた「守山社」「下居宮」または「観音堂」との関連性が考えられる(13)。特に絵中央で、一人の人物が礼拝している鳥居のある小社は、現在その付近に旧守山社の記念碑が建てられていることから、守山社とも何らかの関連があるのだろうか。

さらに、その反対側の参道右側に(画面右手前)には「百澤寺」と文字が記され、複数の建物群が描かれている。現在その建物の一部が残り、そのなかのひとつのかつて百澤寺庫裏の建物だったと伝えられるものが、平成23年(2011)に青森県の県重宝「岩木山神社社務所」として指定された建物であると推測されよう。さらにその右上に、四角に囲われて水を貯めている池のような構造物があり、その上の石垣の壁にある二つの突起物から水が出ている場所がある。これは現在も残っている禊所との関連性が考えられる。詳しくは後述したい。そして、最初の楼門の左隣の入り口を設けた門塀と入り口のような建物が描かれているが、おそらく、現在も使われている山頂へつながる百沢口の登拝道入り口につながっているとみられる。



図⑤「岩木之麓一之鳥居霧中之景」



図⑥「巖木山中茅立之谷径」

その登山道は、絵画の誇張もあるだろうが、現在の登山道よりも狭く深く削り込まれたような谷状の小径として表現されている点が興味深い。また参詣者達が右手に捧げている小型の祭祀具のようなものは、近代以降のお山参詣で用いる小型の御幣とは少々形状が異なっている点にも注目したい。



現代の参詣者が個々に所持する小型の御幣（2008年、筆者撮影）

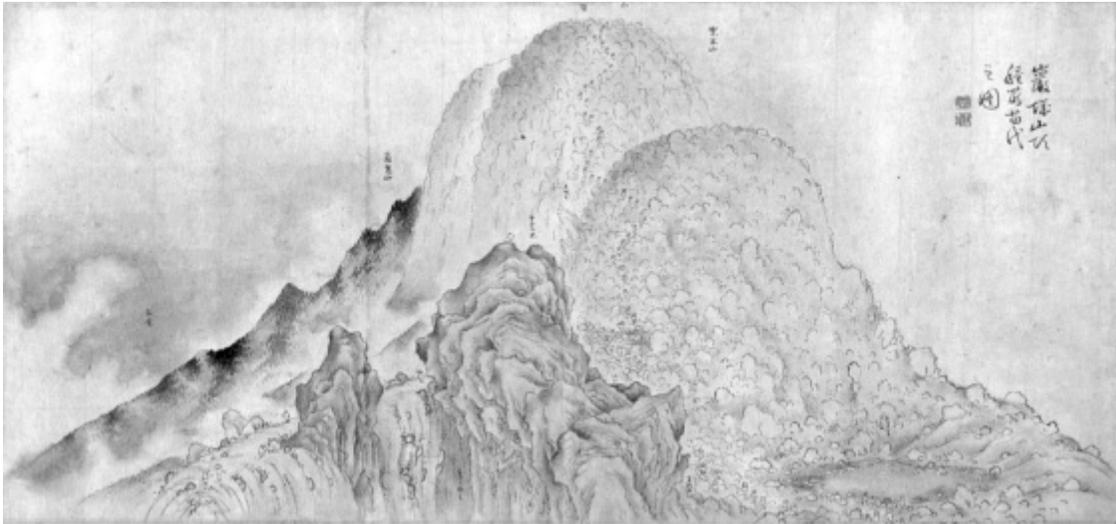
図⑦は「姥石」とその上方にある「大黒石」を描いている。姥石は女人結界石としての伝説があり、現在の参詣でも重要な名所として意識され、その場に参詣者達が参集している様子は、近代以降と共通する習俗である。近代の姥石については後述する。しかし大黒石については、近世の図①でも描かれていたが、昭和50年代以降は、あまり人々の意識に登らなくなり、忘却されつつある名所であるといえよう。なお、これに続く図⑧では、参詣者達が這いつくばるように岩場を登っている様子が描かれており、図⑥で右手に携えていた祭祀具がみあたらない。おそらく姥石が大黒石で奉納して置いてくる習俗があったのではないかと推察される。例えば、近代のお山参詣では、姥石に到着した参詣者達は、めいめい自ら着けてきたタスキを外して石に懸けていく仕来りがあったという。姥石は、近世の女人禁制があった時代でも、女性はこの場所までは登ることが許されており、八月一日には「近迎え」といって、初参りの幼児を案じる母親達が姥石まで迎えに来たという(15)。



図⑨「岩木山中坊子転倒之写景」

図⑨では「坊子転(ぼうずころばし)」という難所が描かれている。これは現在も残る山中の名所で急斜面となっている箇所である。

図中央に大きな滝が描かれ、参詣者達は急斜面を直登せず、迂回するように蛇行して登っている。この滝は、現在の登山ルート上には存在しない。よって現在のルートは近世当時から何らかの変更があった可能性が考えられよう。そして、登っていく先には「錫杖清水」「トリノ海」「風穴」「ヲクラ石(御蔵石)」の名所がみえる。これらの地名も現在も残る。近代の錫杖清水については後述する。



図⑩「巖城山頂種蒔苗代之図」

図⑩では右下方に「タ子マキナシロ(種蒔苗代)」という小さな沼があり、その回りに座り込んで拝んでいるような参詣者達が描かれている。山頂付近にあるこの沼は現存し、現在もこの沼に人々は紙漉りや賽銭を落とし、その浮き沈みで豊凶等を占う習俗が伝承されている(16)。さらにその次に「馬頭石」を通過し、左手に「鳥ノウミ」を見ながら「ヲクラ石」「夫婦石」を経て「岩木山」の「山頂」を遠望している。そして山の向こうには「巖鬼山」とその霊地である「赤倉」の山容もみえる。この赤倉の峰々には、古代から近世まで、鬼神が棲む地だという伝説があった。20世紀始めになっても「神秘の幽谷」「神秘境」とされた異世界であり、探検隊を募集すると多くの人々が注目したという(17)。近代以降は鬼神様を信仰するカミサマなどの民間宗教者の修行場となっている。また、御蔵石(御倉石)については、かつて津軽の人々が亡くなった後、祖霊となってこの石へ籠もるとい説があったが、再検討が必要であろう(18)。なお、19世紀の百澤寺の記録「岩木山年中行事」では、これらの登拝について、道中では、「姥石」「錫杖清水」「体内くくり」「風穴」「種蒔苗代」などの名所があり、水、茶菓子、果物が売られており、「枝松」「けたて」「せんふり」を採取して売るのがいたこと、御幣の紙を盗み取る者がいたことが記されている(19)。これらは近現代のお山参詣へ継承された習俗である。



図⑪「岩木山絶頂之図」



図⑫岩木山山頂に祀られていた黒く丸い石(左) (「外浜奇勝」寛政10年(1798)5月23日条、青森県立郷土館蔵)

図⑪は、岩木山山頂の風景である。「岩木山三所大権現之社」があり「巽(東南)の方角を向いている」と記している。この祠は、おそらく弘前藩城下町の弘前の方角を向いていたのであろう。岩木山山頂の祠は近世から近現代まで、奥宮または御室とも呼ばれてきた。その左右背後にも何かの建物がある。また鳥居も二つみえる。これらは近代以降の風景とも類似している。社の内部には何かが祀られており、人々が拝んでいる。現在の山頂奥宮に祀られている「頭国魂神」の神像は、明治4年(1971)から祭祀されたものであるが、それ以前は観音像がまつられていたとされる(20)。

他にも山頂の祠を描いた近世の絵画がある。18世紀の旅行家菅江真澄が描いた岩木山山頂の絵画である図⑫である。真澄は、寛政8年(1796)3月1日と、寛政10年(1798)5月23日の2回、百沢ルートから津軽地方の霊山である岩木山山頂へと登っており、岩木山の伝説や、百澤寺および寺庵が並び立つ境内の景観、登拝習俗とその道筋の風景などを詳細に記録した。彼の記録によれば、寛政10年(1798)5月23日、岩木山山頂に立ったとき、「御前に、くろくすゝづける石の、まりの大ききなる石の台にすへて、おなじほぐらのうちにひめたり。」とし、岩木山山頂の祠の中には、銅製の仏像三体、石像一体のほか、毬の大きさの黒く丸い石が祭祀されていたことを絵入りで記録している(21)。これらは現存しないが、特に黒い丸石が何を意味する祭祀物であったのか不明である。近世以来、津軽の寺社のなかには石を神体として祀る例が多く、石を岩木山神に見立てて祭祀する例も少なくない。さらに岡山県笠岡市の個人が所蔵する元文3年(1738)の「大乘妙典納経帳」には、六十六部廻国供養で巖鬼山へ納経したときに「岩木山三所大権現本地仏 石頭山(いしがみざん)」と記されているという。石頭山(石神山)の名は、岩木山山麓の床舞村で石を御神体として祀ってきた曹洞宗石神山勝岳院(弘前市)の名前と一致する(22)。

さらに彼は、山中の珍しい草木にも注目して採取している。彼自身が尾張藩の薬草園に勤士した経験があり、本草学や医学に造形が深かった。そのためか、寛政7年(1795)9月5日に、山崎永貞らの推薦により、弘前藩主津軽寧親が設置した藩校稽古館の薬事係に任命されている。彼が岩木山山中で採取した薬草は、兔余糧、毛蓼、稲草、莓実、万年草、岳松、古祁迺微(こけのみ、ガンコウラン)だった。これらの草木のなかには、近世以降の登拝習俗「お山参詣」においても、近年まで宗教者や民衆が採取して、儀礼やマジナイに用いてきた種がある。そのなかの高山植物ガンコウラン(岩高蘭)に注目したい。

ガンコウランは近世当時、百澤寺の記録では「御苔実」として、黒い丸のような絵で描かれているものとみられる。藩主代参のときに、一行が山頂でこれを採取して帰り、翌日には美濃紙に包んで、最勝院、藩主家、家老、御用人、寺社奉行等へ、定められた数を献上する決まりがあった。近代以降、御苔実を採取する習俗は民間にも継承されたの

か、明治期の岩木山の記録に「山中ノ名産苔ノ実」と記述されたり、昭和期までの参詣者が、山中で採取してフクベの酒に入れて「お山の護符」だとお札と一緒に親類知人に配ったという(23)。なお、このように岩木山中では希少な植物が採取できる、という近世の認識は、近代以降も受け継がれ、ガンコウランも乱獲された。昭和4年(1929)、弘前営林署は、夏季の登山者が高山植物を乱獲することを取り締まるため、地元百沢村等から監視員3名を採用している(24)。以上のことから、真澄の描いた山頂の黒い球状の祭祀物と、ガンコウランの関係性について、今後さらに検討する必要がある。



図⑬「巖城山中嵩温泉湯元之図」



図⑭「巖木之麓嵩温泉湯壺之図」

図⑬は、岩木山中の有名な温泉である嶽温泉の湯元の図である。嶽温泉は近世以来の有名な温泉であり、近世には百沢寺の管理下にあったという(25)。図⑭はその麓の浴場の様子であるが、当時の公衆浴場における人々の振る舞いや習俗を描いた貴重な絵画である。

2 近代の岩木山信仰

近代以降、お山参詣は大きく変容していった。近代初頭の神仏分離政策によって、明治3年(1870)に百澤寺、十坊、社家が廃されて、同6年(1873)には、近世まで下居宮だった岩木山神社が国幣小社とされ、近世以来の各堂社内内の仏像や山頂御室の本尊も神像へと交換された。岩木山登拝も定められた登拝時期以外でも可能とされる一方で、参詣日が新暦9月1日へ変更され、参詣文言も神道式への変更が通達された。衣装も、赤色のものや、平尾魯僊筆「岩木山参詣図」(近世、岩木山神社蔵)や工藤仙来筆「お山参詣屏風絵」(明治10年代、弘前市教育委員会蔵)に見られるような様々な衣装から、白装束が主流となっていき、女人禁制が解かれた。そして明治期には、鉄道を使って弘前市を通過する参詣者が増加するとともに、近世のメインルートだった百沢以外の長平、嶽、大石、弥生などの山麓部から登る新しい登拝道が開かれていった。

第二次世界大戦後の昭和21年(1946)には、参詣時期が旧暦8月1日に戻された。戦勝祈願をしたが叶わなかったショックから参詣を廃止したムラもあったという。同22年(1947)、登山囃子の大会が開催された。各地方で差異があった登山囃子が記録された一方で、保存・普及活動のため「正調登山囃子」が作成され、競技大会を通じて「正調」が津軽各地へ普及し一般化していった。

昭和30年代には、バスやタクシーなどの交通機関の発達によって、再び百沢からの登拝が多くなり、近代に開発された他の各登拝道が廃れていった。人々は「百沢口から登ると急勾配だが、長平から登るよりは山頂が近い」といって、多くの人が百沢から登ったという。また「百沢口からカケる(登る)のがワゲモノ(若者)たちだ」とも言われたという。昭和40年(1965)、自動車道「津軽岩木スカイライン」が開通し、翌年には嶽からの登山リフトが開通した。そのためお山参詣では、百沢の岩木山神社前に参集する人々と、嶽から登拝する人々の二つの流れが発生するようになった。昭和50年代には、歴史学、宗教学、民俗学などの様々な学問分野による岩木山やお山参詣の調査・調査活動が盛んとなり、昭和59年(1984)にお山参詣は「岩木山の登拝行事」として国の重要無形民俗文化財に指定された。まもなく岩木山麓の旧岩木町では、お山参詣の体験型観光行事として「レッツウォークお山参詣」や「御来光ツアー」を開始し、参詣は広く観光客にも開かれるようになって現在にいたる。現在のお山参詣には、ムラ単位、企業集団、山伏、カミサマなどのシャーマンと信者たち、有志や観光客のグループ、単独行など、全国各地から様々な目的を持った人々が参加しており、山頂では御来光を拝む人々だけではなく、オシラサマの祭祀を行う女性達もいる(26)。

このような変化のなかにあった近代の岩木山信仰とお山参詣の様子を撮影した写真は各地に残されている。そのひとつが、昭和30年代に、青森県内各地の民俗行事や習俗を撮影した野呂善蔵氏(故人)が撮影した写真がある。遺族から青森県立郷土館へ寄贈された写真のなかに、昭和32年(1957)8月に旧岩木町(現青森県弘前市)地域で行われたお山参詣習俗を撮影したものが複数含まれている。津軽地方における筆者の聞き取り調査によれば、この昭和30年代が、近世以来ムラ単位で行ってきたお山参詣の集団登拝方式が、津軽各地で継続困難となり、変容していく画期であったと推測している。



写真①



写真②



写真③

写真①・②は、参詣者達が長大なゴヘイを掲げて、岩木山を目指して街路を歩いている風景である。写真①は旧岩木町で撮影されたものである。これらの風景は、前掲した近世の図②に類似しており、近世から近現代にかけて多くの人々が好んで描いたり、写真で撮影した構図である。人々にとって同種の構図の絵画や写真は、お山参詣行事そのものを代表するシンボリックなイメージとして伝承されてきた。写真③は、登拝道口となる山麓の百沢にある岩木山神社楼門前の風景である。近世の様子は、前掲の図④で紹介している。参道両脇には、各集落が持参した五色の幟旗が立てられているが、前掲図②で描かれている近世の幟旗は横縞であり、近現代の縦縞とは異なっていたことがわかる。



写真④



写真⑤

写真④・⑤の撮影場所は、岩木山神社楼門に向かって右横の禊所(禊場)とみられる。この場所と施設は、前述した近世の図④でも描かれており、当時から存在する施設だとみられる。現在では、平常でも岩木山神社への参拝者が、石垣から突き出している複数の竜の石像の口から流れ出る水で、己の手や口を清める場となっている。だが写真では、お山参詣時に裸体の男性が水の中にまで入って垢離をとっている。このような行為は現在では全く見受けられず、失われた習俗ではないだろうか。

なお、19世紀、お山参詣に参加する参詣者達には、百澤寺が登拝前の垢離とりを義務化していた。例えば、登山道脇の小川の中で、参詣者達に向かって山伏とみられる一人の裸体の男が垢離をとっている幕末の絵画が残っており「山伏代垢離」という文字が附されている(27)。



写真⑥



写真⑦



写真⑧



写真⑨



写真⑩

写真⑥、⑦、⑧、⑨、⑩は、岩木山中を登っているお山参詣の参詣者達である。その服装は、上下ともに白色を基調としたシャツやズボンである。さらに頭に鉢巻、賽銭などを入れる頭陀袋を首から下げ、手にゴヘイを持ち、足下は草鞋掛けとなっている。その基本形態は、前掲の近世の図⑥、⑦、⑧の近世の参詣者達の装束に重なるものといえよう。

なお、⑥から⑩の写真で、人々は見晴らしのいい平原を登っているが、昭和50年代以降の登山道は、雑木林やガレ場等が多く、このような見晴らしのいい場所はほとんど無い。昭和30年代以降、植生または登山ルートの変化があったのであろうか。



写真⑪



写真⑫



写真⑬



写真⑭

写真⑬から⑭は、登拝道の途中にある名所「姥石」に参集する人々を撮影したものである。近世以来の女人結界の場としての姥石は、明治初期に岩木山の女人禁制が解かれたため、その役割も変化した。それでも昭和50年代以降のお山参詣や通常の登山者達の間では、この姥石で休憩をとる行為が伝承されている。例えば、近代では、姥石に到着すると自分のタスキを標識にかけた。あたりには掛け茶屋が出店しており、冷水やスイカ、ナシ等が売られていたという(28)。昭和50年代から昭和60年代にかけても、幼い頃に筆者が通った剣道道場の親子登山行事や高校の部活動の一環として登る際にも、引率する成人たちは、子供達へ姥石で小休止するよう指導する場面が多かった。その行為は、前掲の図⑦に描かれた近世の様子と重なるといえよう。なお、これらの近代の写真では、姥石周囲に結界が張られて御幣が立てられている様子がみえる。また、写真⑭では、石の背後に簡素な掘っ立て小屋のようなものが建てられ、内部に座る数名の人物が写っている。これらの構造物は現在、失われたとみられる。前掲した近世の姥石を描いた図⑦では鳥居が建っていた場が、近代にはそれらが失われ、異なる風景へと変化していたことがわかる。



写真⑮



写真⑯



写真⑰



写真⑱

写真⑮・⑯・⑰・⑱は、山中の名所「錫杖清水」の写真である。古代に弘法大師の錫杖で湧水したという伝説がある。これは前掲の図①と図⑨にもその地名があり、近世以来の山中の名所であり、現在でも清水が湧いている場所である。現代の参詣者や登山者達も、写真⑮や⑯のように、ここで休憩し、湧き出ている冷たい清水を汲み上げて持参した水筒に汲んだり飲むことが多い。写真⑰・⑱では大型の樽に水を汲み、背負子に載せて背負っている男達の姿が写っている。昭和40年代の書籍でも同様の写真が掲載されており「水運び」というキャプションが付けられているが、現在ではあまり見受けられない行為である(29)。



写真⑲



写真⑳



写真⑳

写真⑱・㉑・㉒は、岩木山山頂での風景である。山頂は写真⑱のように大きな岩石が転がり、大型の植生はみられない風景で、人々はそれらの岩上で休息をとる。この様子は近世の図⑪と図⑫につながるものである。また写真⑳は山頂の奥宮とそこに納められている岩木山神像である。その歴史については前述した。写真では、左側から男性が内側に手を差し入れようとしているが、お山参詣習俗のひとつである。山頂に到達した参詣者達は大声で「ハジ、来たジャー」と岩木山神の像へ呼びかけながら、持参した餅をその御体体にこすりつけて護符として持ち帰るのだという。なお、参詣者が声を上げながら、持参した御幣で山頂の御堂を叩く行為が近世以来あったという。近世の百澤寺時代の岩木山信仰を記した「合浦奇説」によると、当時の御山参詣では、山頂で「参詣の道者御堂の背稜に廻り幣帛を以て屋根を叩き斉口に祭文を称へ、而して正稜至り各拝稽す、奈何なる故かは知らず往古よりの習俗也」とあり、その行為は古い時代からのものであるが、近世当時既にその行為の意味は不明となっていたという(30)。現在、この習俗を行う人は高齢化して少なくなっており、習俗の由来や意味について明らかではない。

伝承によると、岩木山の神の古名は「オハツ」または「ハジ」という女性の神様で焼きもちやきであるという。森山泰太郎は、このハチの呼び名について、北東北の伝説で、外来の僧南祖坊と争った十和田湖の主「八郎」または「八ノ太郎」との関連性や、関東の伊豆地方で山に入るときに八人を忌む習俗との関連性を指摘していたが明らかではない。さらに津軽地方の黒石では、岩木山神の名前は「おハチさま」だといい、島田髷を結って蓮華の花を両手にもっている姿だとする伝承があったという。その姿は、神仏分離以前に山頂御室に祭祀されていた聖観音像の姿に重なるのではないだろうか(31)。さらに「ハチ」の呼称については、中世期の岩木山が八葉山天台寺の支配下にあったことも何らかの関係要素として考えてみるべきであろうか(32)。

また、山頂で岩木山神を大声で呼ぶ理由として「この神は、耳が遠いからだ」という伝承がある。同じく耳が遠い神仏の類例は日本各地にもある。例えば、兵庫県西脇町の山神社では、参詣可能な時間は夜に限り「山の神は聾だから」といって、盛んに神扉を叩いて祈願することが一時流行したという(33)。また、小池淳一によると、兵庫県西宮のエビスでは、参詣者が拝殿をトントン叩くのが例であるという。さらに大阪の今宮戎神社は「ツ〇ボエビス」と呼ばれ、近年でも「エベッサンは耳が遠いから」「エベッサンはいつも眠っているから」といって、参詣者達は、本殿で参拝した後、本殿の周りを時計回りにまわって、本殿裏で羽目板(現在はドラ)をトントン叩きながら、「エベッサン今年も頼んませー、お参りに来たさかい、ほんまに頼んませー」と声をかけながら祈っていくといい、岩木山お山参詣との類似性を指摘している(34)。

さらに同じ青森県内の類例としては、五戸町で「大黒様は耳が聞こえない」という。よって大黒様の年取りの12月10日には、二股の大根でお膳を叩いて呼ぶという(35)。西宮のエビスや青森県内の大黒様との関連性は森山泰太郎も指摘していた。それによると、津軽では「大黒様はキカズ(耳が遠い者)」だから、毎年12月9日の大黒様の日には、一升枀に豆を入れて供える際に、枀を両手で揺さぶって中の豆をガラガラ鳴らしてから供えるのだという(36)。さらに、近世の岩木山信仰を統括していた百澤寺では、大黒様の信仰を重視していた形跡があり、近世の百澤寺が祭祀していた大黒様の像が、百澤寺住職の子孫多田家に残されていたという(37)。さらに岩木山中の登拝道には、近世以来の名所で「大黒石」が存在してきたことは既に述べたところである。岩木山神の多様な神格の一要素には、大黒神の神性も含まれている可能性があるだろう。

すなわち、現在の岩木山神は、近世の岩木山三所大権現やそれに連なる聖観音、近代の神仏分離以降の顕国御神等の岩木山信仰を統括してきた百澤寺や岩木山神社等の公的な宗教者が祭祀した神仏の性格とともに、民衆が信仰してきた安寿姫伝説等に代表される女神としての山の神や「ハチ」という呼び名の民俗神、百澤寺が祭祀していた大黒神などの様々な神性を引き継いだ歴史的重層性の上に形成されてきた多面的な存在であり、人々は、ときおりその多彩な姿と互いの要素の矛盾に混乱することがあろうとも、それら全ての要素を包括する神性として信仰してきたのではないかと。

そして写真②は山頂での御来光を遙拝している参詣者達である。



写真②



写真③



写真④

写真②・③・④は、お山参詣のなかで失われた習俗である。これは参詣者が下山時に、百沢の「一の鳥居」で、脱いだワラジを笠木に投げかけてから踊るもので、鍵掛けの占いのように一度でかかると願いがかなうものだという(38)。現在、この「一の鳥居」は存在しない。だが同様の習俗は、近年まで、同じ青森県の下北半島むつ市川守町で、近隣の霊山である釜臥山へのヤマカケでも伝承されていた。釜伏山の信仰は岩木山信仰と直接の関わりはないが、そのヤマカケの習俗形態は、岩木山のお山参詣と類似している。ヤマカケから帰ってきた男性達が、履いていた草鞋を産土社稲荷神社裏の高い木の枝に投げて引っ掛けようとする。ひっかかると縁起がよいとされる(39)。

なお、前掲の近世の図⑤でも、「一之鳥居」が描かれている。19世紀中期頃の登拝では、百澤寺境内は火気使用を禁じているものの、夜中に登山する者は「一ノ鳥居」から先は「明松」(松明)の使用を許可するという触れが出ていた(40)。よってこの一の鳥居は、前述した姥石とともに、近世から近代にかけてお山参詣における岩木山山中の重要な結界のひとつであったと考えられよう。



写真⑮

写真⑮は、前掲の近世の図②の左側で「還」と記されている行為であり、お山参詣から下山する際の踊りである。近代では「バダラ踊り」または「バダラ」とも呼ばれる。お山参詣を無事に終えた人々が、烏帽子をかぶり面をつけて「いい山かけた、バダラ、バダラ、バダラよ」と歌い踊りながら帰ってくるものである。近代の様子を撮影した写真⑮では烏帽子はかぶらず、駄菓子屋で買ったような思い思いのオモチャの面を付けていたようだ。現在も烏帽子は用いられていない。

3 まとめにかえて

本論では、岩木山信仰に関わる代表的な年中行事であるお山参詣について、近世の絵画史料および近代の写真等を用いて、民衆の習俗の歴史の変遷と継続してきた要素について具体的に考察した。さらにそのなかで岩木山神の神性を構成する多彩な要素と変化についても、今後の研究課題として提示した。

このような岩木山信仰における歴史的变化は、他にも様々な理由で発生して、現在の行事形態が形成されてきたのであろう。そのなかでも注目すべき変化が、2019年の冬から日本全国で流行した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が与えている日本各地の民俗行事への影響である。これまでの歴史的变化よりも、急速かつ異質な変化を招いている(41)。例えば、2020年以降のお山参詣も、コロナ防疫体制のため、史上初の開催方式をとった。例えば、2021年9月5日のお山参詣では主催者から、登山囃子とともにサイギサイギの掛け声を響かせる集団登拝や御来光を拝むための夜間の登山を自粛するよう要請があり、前年2020年に続いて、規模を縮小した開催となった。例年であれば、岩木山神社の参道に並ぶはずの出店も無く、カラオケ大会も中止となり、静かな「向山(むかいやま)」で行事であったという。多くの参拝客はマスク姿であり、山頂へ登拝する代わりに、麓の神社へ祈禱と奉納に訪れた団体もあったという。しかし個人参拝や日中の岩木山登拝は可能としたため、そのルートである津軽岩木スカイラインは営業した。そして例年、旧暦八月一日に山頂で迎える「朔日山」の御来光遥拝は、午前4時頃から、岩木山神社と地元ラジオ局FMアップルウェーブの動画サイトでライブ配信が行われた。特別に許可を得た報道関係者10名のみが未明から山頂に登り、午前5時10分頃に御来光が登るのを撮影できたという(42)。

本稿を執筆している2023年1月現在も、日本各地では新型コロナウイルス感染症の感染拡大は収束していない。もし今後も、数年間にわたって防疫体制の開催方式が継続されれば、岩木山信仰とお山参詣行事の伝承形態にはどのような影響が及ぶのだろうか。岩木山信仰史上、初めての変化の過程を注視し記録していきたい。

(注)

- (1) 青森県教育庁文化財保護課ホームページ「岩木山の登拝行事」(https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-bunka/minzoku_mukei_04.html) 2023年1月10日取得
- (2) 品川弥千江 1968『岩木山』東奥日報社、p62～63
- (3) 拙論 2003「岩木山信仰形成における宗教者の役割と習俗の変化」(青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ編『青森県史研究 第8号』青森県)
- (4) 福井敏隆 2015「下居宮と百澤寺—岩木山神社はいつからこう呼ばれるようになったか—」(「岩木山を科学する」刊行会編『岩木山と科学する2』北方新社)
- (5) 拙論 2010「引札の配札圏からみた岩木山信仰」(青森県立郷土館『青森県立郷土館研究紀要 第34号』)。
- (6) 近世の岩木山登拝は、延宝4年(1676)8月2日にも行われている(弘前藩国日記)、平良野貞彦「奥民図集」天明8年(1788)のお山参詣の図(青森県立図書館1973『青森県立図書館郷土双書5 平良野貞彦「奥民図集」』)
- (7) 前掲小山 2003、p32～34、平内の例は「畑井家文書」の寛政2年(1790)条(平内町1977『平内町史 上巻』p89)
- (8) 金子直樹 1998「岩木山における参詣登山道の歴史の変遷」(関西学院大学『歴史地理学 191号』)
- (9) 前掲品川 p96・108～109・180、小館衷三 1977「岩木山の山岳信仰」(月光善弘編『山岳宗教史研究叢書7 東北霊山と修験道』名著出版、p55)
- (10) 「東奥 「東奥津軽山里海観図」」(青森県立郷土館所蔵)。当該資料の材質は和紙(紙本着色)で、裏打ち済みで画帳仕立てとなっている。法量は、外寸が縦29.7cm、横44cmとなっており、上巻は28丁、下巻は32丁ある。なお、本図各頁に様々な大きさのグラビア状の作品が付いていることから、本来は3巻の巻子仕立だった形態を、後世に冊子2冊分に仕立て直したものとみられる。
- (11) 瀧本壽史・渡辺麻里子編 2020『歴史的転籍 NW 事業 異分野融合共同研究 文献観光資源学「津軽デジタル風土記の構築」プロジェクト 津軽デジタル風土記資料集—弘前大学・国文学研究資料館共同研究成果報告書—』国立大学法人弘前大学・人間文化研究機構国文学研究資料館、p57～59)。
- (12) 前掲品川 p71～72
- (13) 近世の百澤寺境内の概要は、前掲品川 p71～73に図がある。前掲小山 2003、p28～35
- (14) 前掲品川 p90
- (15) 森山泰太郎 1965『「郷土を科学する」第1集 津軽の民俗』陸奥新報社、p164、前掲品川 p96
- (16) 森山泰太郎 1972『日本の民俗 青森』第一法規出版株式会社、p170
- (17) 昭和4年8月11日付け「弘前新聞」記事「愈々踏破される赤倉の神秘境 弘前山岳会員約八十名 昨日勇ましく壮途に上る」
- (18) 前掲小館 p53、拙論 2001「岩木山信仰における祖霊論の再検討—オイワキヤマに死者は行くのか—」(『東北民俗学研究会 第7号』東北学院大学)
- (19) 前掲小山 2003、p36
- (20) 小山隆秀 2010「引札の配札圏からみた岩木山信仰」、『青森県立郷土館研究紀要 第34号』、p53)、明治3年(1870)弘前藩は神仏分離により、近世以来仏体であった山頂御室と下居宮の像の交換を命じ、山頂の聖観世音菩薩の像も撤去されたという(前掲福井 p20～21)、前掲品川 p84
- (21) 「津軽の奥」寛政8年(1796)3月1日条、「外浜奇勝」寛政10年(1798)5月23日(DVD「第Ⅲ部 菅江真澄の日記・紀行」(青森県史編さん民俗部会編 2014『青森県史 民俗編 資料 津軽』青森県、内田武志・宮本常一編 1972『菅江真澄全集 第3巻』未来社、p62～67・p173～175)
- (22) 前掲小館 p54～56
- (23) 『風俗画報』第214号、1900年8月15日、拙論「岩木山「お山参詣」における御来光遥拝と草木採取について」(東北芸術工科大学東北文化研究センター真澄学編集委員会編 2011『真澄学 第6号』東北芸術工科大学東北文化研究センター、p86
- (24) 岩木山中で霊草や霊薬として採取された高山植物については前掲品川 p141が詳しい。昭和4年(1929)8月6日付け「弘前新聞」記事「高山植物の採取を取締る 岩木山に監視人を派遣して」
- (25) 前掲品川 p119～120
- (26) 拙論 2014「岩木山信仰とお山参詣」(「岩木山を科学する」刊行会代表豊川好司編『岩木山を科学する』p65～70)
- (27) 近世の御山参詣における「山伏代垢離」の絵は、津軽の国学者平尾魯仙が文久年間(1861～1863)に描いたとされる「津軽年中行事画卷」(個人蔵)所収の「奥州津軽岩木山從八月朔日同十五迄参詣往返之図魯仙写」のなかで描かれている(青森県立郷土館 2013『青森県立郷土館開館40周年記念 平尾魯仙 青森のダ・ヴィンチ』p112上の図)。
- (28) 前掲品川 p96
- (29) 前掲品川グラビア写真「水運び」、p175
- (30) 前掲森山 1965、p164～165、前掲品川 p97・p109 掲載の「合浦奇説」下段 1 1～3
- (31) 他にも岩木山神の名前が「オハツ」「ハジ」とする伝承は、2020年に青森県西津軽郡鱒ヶ沢町で筆者聞き取り(「103歳で亡くなった親から聞いたが、岩木山の神様はオハツという名前の女性の神様でやきもち焼きであるという。」)、前掲森山 1965、p164～165。なお近世の岩木山山頂で祭祀されていた聖観音像の写真は、前掲品川 p82に掲載されている。
- (32) 岩木山の縁起には、かつて当山の別当職を南部之観音院(現岩手県浄法寺町の「八葉山天台寺」)が務めていたと記されている。(元禄14年(1701)「岩木山百澤寺光明院」および「解題編(東北地方)」(五来重 1983『山岳宗教史研究叢書 17 修験道史

料集 [I] 東日本編』名著出版、p5・p625)、「岩木山百澤寺旧記」(岩木山神社所蔵)の原本も近世前期まで南部観音院にあったという(前掲品川 p69)

- (33) 石巻良夫 1914 「名古屋雑記」(『郷土研究 1 巻 11 号』 p26 ~ 28)
- (34) 小池淳一 2016 「神仏を叩くー民俗信仰の原形ー」(『西郊民俗 第 236 号』西郊民俗談話会、p2 ~ 5)
- (35) 能田多代子 1969 『みちのくの民俗：南部・五戸の話』津軽書房、p51 ~ 52
- (36) 前掲森山 1965、p164 ~ 165
- (37) 前掲品川 p69
- (38) 前掲森山 1965、p167
- (39) 青森県史編さん通史部会編 2018 『青森県史通史編 3 近現代 民俗』青森県、p791)。なお同書には、筆者が参与観察調査で撮影した釜臥山のヤマカケの記録映像のDVDも収められている。
- (40) 拙論 2003、p32
- (41) 特にコロナ禍が、東日本各地の民俗行事に与えた影響の概要については、拙論 2022 「コロナ禍における北海道・東北地方の民俗行事の現状」日本民俗学会『日本民俗学 310 号』を参照されたい。
- (42) 2021 年 9 月 6 日付け「陸奥新報」記事「お山参詣 今年も静かに 新型コロナ感染対策 規模を縮小し開幕」、2021 年 9 月 6 日付け「東奥日報」記事「感染予防 静かな向山 岩木山お山参詣」、2021 年 9 月 8 日付け「読売新聞青森版」記事「「お山参詣」ひっそりと 岩木山神社」、2021 年 9 月 8 日付け「陸奥新報」記事「「最高のご来光」 岩木山 お山参詣朔日山 2 年連続山頂照らす」

(謝辞)

近世史料の翻刻等で佐藤良宣氏に御協力をいただいた。